
陰陽ノ京

yoshina

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽ノ京

【Nコード】

N4380C

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

コナンを小説「陰陽師」のパロディにしてみました。陰陽師・工藤新一とその友人服部平次による平安時代版事件モノ。若干キャラの口調や振る舞いに違和感があるかもしれませんがご了承ください。現在番外編第一弾終了。パロディが苦手な方はご遠慮されたほうがいいと思われます。

「乙暗鬼」 壺（前書き）

陰陽師：呪術作法を行い、せんぜい占筮・地相判定などをつかさどった陰陽寮に属する人

「乙暗鬼」 壺

りりい、りりい、と鈴虫が庭先から流水の如き潤いを持った音で鳴く、夕暮れ時。

白い狩衣を着た男が、隣で赤い唐衣を纏う女から酒を注いでもらい、ゆるりと杯を口に運んでいた。

陰陽寮の陰陽師・工藤新一である。

新一の屋敷は一条戻り橋付近の鬼門と呼ばれる場所に構えてあった。

その屋敷内では全ての障子が開け放たれた広い部屋が一つある。そこから臨む大きな庭には、四季によって様々な植物が華やいていた。

今だと朝顔が一番の見頃だろう。

暫くの間どちらも言葉を発せず静かな宴を催していたが、つと、新一の杯を持つ手が止まった。

女も徳利を下ろし、門のあるほうへ視線を遣る。

他の人間には見えない何かが彼らには見えているようだ。

「……来たようだな。蘭、行ってくれないか？」

「はい」

蘭と呼ばれた女はそう頷いて立ち上がると、すつと溶け込むようにその場から消え去ってしまう。

人では無い動きである。

それを新一はさも当然のように認め、杯を床に置く。

そしてどこからともなく新しい杯をもう一つ出してその隣に下ろした。

数分後、廊下から二足の音がこちらへ向かって近づいてくるのがわかった。

障子は無いので、すぐさまその足の主は見えた。

蘭の後ろからやって来た深緑の束帯を纏う男に向かって、新一は居住まいを正して頭を下げる。

「ようこそおいでくださいました」

「ああ、すまん。突然邪魔をして。頭はもう上げてもらてええで」

「では、失礼をして。どうぞ、あちらの上座のほうに……」

「それもええわ。お前の正面で、ええ。そっちのほうが話しやすい」

「はあ」

雅楽寮に属する殿上人・服部平次は、そう言って新一の座する所から杯を挟んで正面に座った。

笛の名手としてその名が都中に知れ渡った雅楽家である。

有名な武将の血を引くだけあって、やんごとなき身分とは言え、中々凛々しい顔つきだ。

そんな彼が、地下人の新一の元に訪ねてもよいかと宮中で声をかけてきたのは、朝方のことだった。

初めて声をかけられた上いきなり訪問の是非と問われた新一は最初いぶかしく思ったが、その真剣な顔つきに興味を惹かれ、首を縦に振っていた。

「酒はどうします？ 目の前に用意してございますが」

「なら、もらっ」

新一が蘭に目を遣ると、合わせたかのように彼と平次の間に座り徳利を持つ。

彼女はお辞儀をして、平次が手に取った杯にゆっくり酒を注いでいく。

「この女性はお前の侍女か？」

「そうといえばそうとも言えるかもしれませんが、厳密に言えば私の式神でございます」

「式神？ 人ではないんか？」

「ええ。まあ、私が呪をかけた霊的存在とも思ってくださいれば」

「……なんや、ようわからんなあ。ま、ええわ。それで、単刀直入に用事に移りたいんやけど」

理解できないことは深追いしない性質らしく、首をかしげた後、朝と同じような神妙な顔つきで平次は早々と切り出す。

新一も頷き同意を示した。

「はい、朝方にもお聞きしました」乙暗鬼^{おとくれおに}「ですね」

「そうや。あの鬼に雅楽寮が困つとんねん」

乙暗鬼。

それは最近四条大橋付近に出没する、人の成りをした鬼のことである。

宮中から屋敷へ戻る途中の貴族を牛車から引きずり出し、「音をくれ」と言つのだ。

その場で貴族が笛やその他楽器を持っていれば、それを渡す。受け取った鬼はそのままどこかへ姿を消すのだが、楽器を持ってなかった場合はそのまま食われてしまうという。

「来週雅楽会が宮中であるのに、その鬼のせいでどんどん楽器が無くなっているんや。楽器さえ渡せば何もせず大人しく帰るからな。四条大橋を渡らねば帰れぬ公達がどんどん倉から持っていつてしまふ」

「成程、それは困りますね」

全然困つてはいなさそうな顔で、新一は言う。

平次はそれを対して気にはせず蘭に注いでもらった酒をぐいと飲み干す。

どうやらいける口らしい。

「そやから、陰陽の道に長けたお前に何とかしてほしいんや。鬼退治は専門やと聞いたけど……」

「退治ではありませんよ。鬼の対処が、専門の一つになることはいえませんが」

「じゃあ、この頼み聞き入れてもらえるか？報酬はきっちりする」

大事な会に関わることだ。

ここで褒美をけちるほど平次は狭くない。

しかし、新一はふっと笑って首を横に振る。

「報酬はいりませんよ。——ただ、」

「なんや？」

「この鬼が片付けられましたら、貴方の笛をここで一度聞かせてもらってもよろしいでしょうか」

「そんなことでええんか？」

「はい。貴方の雅楽家としての名声は都中で広まっております。そんな貴方が特に好む笛を、庭の臨むここで聞けることに勝る報酬はございません」

「……なんか、褒めすぎとちゃう？」

「そんなことはありませんよ」

にこにことしながら新一が隣の蘭に「なあ？」と問いかける。
同じくにつこりと笑って彼女も頷いた。

「そんな報酬でええなんぼでもするけど……。で、いつから動いてくれるんや？」

「早いほうがいいですか？」

「そら勿論」

「では今からその橋に行ってみましょう」

「今から!？」

早くても明日かと思っていた平次が声を裏返す。
もうすぐ日も暮れるのだ。

「御心配なさらぬよう。遠巻きに眺める、ただの様子見です」

「……なら、俺も行ってええか？」

「よろしいですが、鬼は怖くないのですか？」

「俺は何故かあんまそういうのは感じひんねん。それにお前もいるなら大丈夫やろ」

この平次という男は人を疑うということを知らない人種らしい。初めてまともに会話した新一を、もう信用している。そんな真つ直ぐさに内心苦笑しながら新一が立ち上がる。

「では行きましょうか。牛車を用意させます」

「ああ。……ところで工藤殿」

「何ですか？」

「その敬語はやめてくれへんか？ そら、一応俺のほうで官位は上やけど、同年代っばいお前にそうやって恭しくされると何か居心地悪いわ。普通に、くだけた言い方で話してくれたらええで」

少し苦笑して平次が頼む。

帝に直接会える殿上人が、逆に会うことを許されない地下人に敬語を止めるよう言うのは、常識的に考えて珍しいことに違いない。

新一も少し驚いたようで、そこは領かなかった。

「それでは、私が周りの人間に注意されてしまいます」

「じゃあ俺ら二人だけの時くらいは、敬語取ってくれ」

ホンマ頼むわ、とぼりぼり頬を掻く。

どこか断れない雰囲気を持った困り顔を、新一は何を考えてるのかじつと見つめて、次にふうと息を吐いた。

やれやれという表情ではない。先ほどのような突き放すとも言える冷たい笑顔ではない、年相応の顔つきをした男になっていた。

「……わかりました。では貴方も私に”殿”とはつけず呼び捨てしてください」

ぱあつと平次が笑顔になる。

「わかった。お前も呼び捨てにしてや。——ほな”工藤”、行こか」

「ああ、”服部”」

そこから二人は蘭の持つ蠟燭に導かれ屋敷を出た。

「乙暗鬼」 壱（後書き）

安倍晴明↓工藤新一（クール度3割増し）

蜜虫↓蘭（静かな色気度2割増し）

源博雅↓服部平次（坊ちゃん度4割増し）

この設定で数話ほど遊んでみたいと思います。

原作を知らない方でもわかるように書くつもりです。

わからない単語があっても、「何となく」で雰囲気をつかんでも
らえれば…（笑）

「乙暗鬼」 貳

一条から四条へ上がる牛車ごとりと進んでいく。

車を引く牛の前にはひらひらと舞う紫の蝶が飛んでいて、目的地へ導いているかのようだった。

これも恐らく新一の式神なのだろう。

中では彼が平次と話をしている。

「あの式神…蘭殿やったか。車に乗るまではいたはずやけど、どこ行ったんや？」

「それならここさ」

狩衣の折り目に手を入れ、人型の形をした一枚の紙を取り出した。

「それが!？」

「ああ、これがさっきまで蠟燭を持ってくれてた蘭さ。この中では狭いからしばしの間、これに戻ってもらった」

「ほおー……」

新一の屋敷に来た時から、目に見るもの全てが生まれて初めて知ったものばかりで、平次は面白そうにその紙をしげしげと見つめる。他の貴族が「人外を操る怪しげな陰陽師」と言って敬遠する新一

を、彼は「不思議な術を使うすごい男」とみなしてるらしい。

一方、敬語は取れと言われ早速同等の身分のように話す新一も、そんな彼を興味深げに見ていた。

「そういえば服部、どうしてお前は牛車で俺のところまで来なかったんだ？ お前ほどの身分なら、一人で徒歩で来るほうが珍しいと思うけど」

「あんま車は好かんのや。少しくらい遠くても、歩ける距離なら一人で行くで。せっかく外へ出るなら、景色を見ながら歩いたほうがおもしろいじゃん」

「それはそうだ」

あっけらかんと自論を述べる平次に、新一もあっさり同意する。

彼自身も、車で移動するよりそちらのほうを好むのだろう。

その後平次が外の蝶のことや、誰もいなくても勝手に門が閉まる新一の屋敷の門のことなどを聞いているうちに、四条大橋に着いた車を少し遠くのほうに置き、二人は降りて橋の近くまで行こうとする。

すると、その二人の目の前を別の牛車が通り過ぎていった。

小道から橋へ通じる大通りに出ようとした矢先だったので、新一達の存在には気付いていないようだ。

新一が無表情でそれを見つめていると、平次が横から話しかける。

「あれは多分、藤原様の車やな。九条あたりに住んでおられる方や」

「そうか。ではどのようにして通るのか見てみよう」

九条藤原氏の車はゆっくり橋を渡っていく。

車の側に付き従っている小舎人童こどねりわらわや家人の男数人が、びくびくしているのが後ろからでもわかった。

ごとり、ごとり、と進む牛。

橋の真ん中くらいまでにそれが来た時、向こうから人の形をした何かがやってきた。

黄土色の狩衣を着た男だ。

夕暮れに薄い霧が立ち込め、距離もあったので、顔ははっきりとは見えなかったが身なりからして恐らく男だろう。

そしてそれこそが、都で噂になっている「乙暗鬼」に違いない。

「もし――」

男は存外よく通る声で車に向かって声をかける。
童と家人がひい、と腰を抜かした。

「音を持つてはいませぬか？」

暫く、車中の主は黙っていたが

「持っておる」

「ではそれを私にください。さもなくば……」

「わかつてる、家人に持たせてあるので持つて行くがよい」

名前を呼ばれて我に返ったある家人が、懷に忍ばせていた笛を男に渡す。

笛を持つ手が震え、齒ががち鳴るのを止められない。

そんなことを露ほど気にせず男は手に取って、「おおっ」と声を上げた。

「私が本来所望するものではないですが、これはまた良い木で作られた笛ですね。……お通り下さって結構です」

「……」

一応、藤原氏は見栄を張って怖がっている様子は見せなかったが、車は足早にその場を立ち去っていった。

ちなみに鬼は、通行の許可をした時点で消え失せている。

「ああ、また楽器を一つ失っでもうた」

一部始終を見届けた平次が嘆く。

ここを通らねば随分遠回りになる貴族がどんどん楽器を持つていつてしまうため、倉の楽器は近い将来無くなってしまうかもしれない

い。

「そう気を揉むな服部。今のやり取りで大体把握した。では、準備をしておこうか」

「準備？」

「ああ、楽器を取り返す準備をな」

もうだいぶ日が暮れてきた橋の側で新一は懷から何かを取り出す。その彼の手元を、いつの間にか出てきた蘭が持つ蠟燭の火で明るくさせた。

「何や、それ？」

「明日になればわかるさ」

橋の左側の地面に、何か小さいものを埋め込んだ。

若干盛り上がった土の上をぽんぽんと叩き、新一は立ち上がる。

「さあ戻ろうか」

「今度はいつここに来るんや？」

「明日だよ。また同じ夕暮れ時にここに来よう」

新一が停めた車の元へ戻る。

平次も後ろからそれに続き、また蘭がどこかに消えている。

橋側に埋められた小さな物体と音を取る鬼。

この二つの意外な正体を知るのは明日になるのであった。

「乙暗鬼」 参

そして新一が言っていた次の日の夕刻。
橋の前にやってきた彼は隣の平次に問う。

「これから俺は鬼に会いに行く。お前はどつする？」

「俺も行く。ところで、鬼に会ってどつするんや？丸腰やん、俺ら」

そう、本当なら弓矢の一つでも持っていきたかったところだが、それを新一に止められていた。

止めた彼もまた、見たところ何も持っていない。

「丸腰ではないさ。昨日準備もしただろう？」

「準備って……あれかいな。あの土に埋めた何かか？」

「そうだ。あれで十分だろう。不安ならここにいたほうがいいぞ」

「怖くはないって昨日言ったやろ」

平次が若干むっつとして言い返す。

本当に怖くはないので見栄ではないが、負けず嫌いだ。

「はは、そうだったな。——じゃあ、蘭。そこで車の番をしておいてくれ」

蘭が了解のお辞儀をすると、二人は黙って橋を渡り始める。

新一は平然とした表情だが、平次は流石に心許無い気持ちだった。一応普段から持っている自分の笛・葉二があるにはあるが、これを渡すつもりは毛頭無い。

昨日と同様、頭上で烏が鳴く霧の立ち込めた怪しげな空気が二人を包む。

橋の真ん中まで来ると、やはり前から黄土色の狩衣を来た男がそろりそろりとやって来た。

「来たぞ、工藤……」

「ああ」

立ち止まって、近くまで男が来るのを待つ。

一丈ほどのところまで来て男は止まった。

身なりや顔は普通の男だ。

年は四十前後といったところか。

しかし、口から鋭く尖った歯が二本生えて見えている。

目も少し怪しく光っているみたいだ。

まさしく鬼。

「音を持つてはいませぬか？」

男の姿をした鬼は柔らかい物腰で問う。
持つてはいないと答えたら食われる。
が、

「持つてはいませんし、持つていたとしても渡すつもりはありません」

新一は飄々と言つてのけたのだ。

平次は彼が何か持つているのかと思つていたので、その答えにうるたえる。

とはいえ、ここまで来ては仕方ない。

言葉を紡ごうとした口を固く締めて腹を決め、側で見守ることにする。

一方、持つてないと言われた鬼は少し黙った後、先ほどよりも目を赤く光らせ言った。

「本気ですか？無かつたら食われることは承知ですよね」

「ええ、存じてます」

「それでも持つてない？」

「はい」

「そうですか。ならば……」

めりめりという音と共に、顔がどんどん土色に変化していく。
歯がより一層下に生え、耳が尖り頭から角が二本ひょっこり現れた。

髪も白髪交じりで橋につくほど恐ろしく伸びた。

もう人間の顔ではない。

地から響くような低い声を、伸びきった歯の隙間から出す。

「望みどおり、お前等を喰らうてやろう」

声には出さなかったが、平次が思わず後ずさりをする。

こんな間近で鬼の変化を見たのは初めてなのだから仕方ない。
悲鳴を上げなかっただけでも大したものだ。

反対によくこのような光景を目にしているであろう新一は、側で
未だに平気な顔をしている。

じやり、と鬼が一步足を伸ばす。

平次は隣を見る。

しかし、新一はまだ動かない。

そして爪が異様に伸びた手を新一の首にかけようとした瞬間。

とん、

新一の右足が橋の床を叩いた。

すると突然、鬼の足元から太い緑色のツタのようなものが何本も物凄い速さで生え始め、鬼に絡み付いていった。

「な、なんや!？」

平次が叫ぶ。

鬼も吼えツタを取ろうとするが、もがけばもがくほどそれはどんどん纏わり、手足をきつく縛りつけた。

死なない程度にぎりぎり絞められた首から上を左右に振り乱し、白目をむいた恐ろしい形相で苦しそうに新一を睨み付ける。

「おのれ、謀りおつたなあ……っ！」

睨まれた本人は薄く笑う。

そして鬼の二倍ほどまで伸びたツタが動きを止めた時には、一本の木の様な大きさを見せていた。

「乙暗鬼」 肆

鬼を絡め取るツタを見上げて、驚きながら平次が問いかける。

「く、工藤。これは何や？」

「朝顔のツタさ」

「朝顔！？」

「昨日埋めたのはこの朝顔の種だったんだよ」

この種は、新一郎の庭の朝顔から取れたものである。

様々な霊気の集う屋敷で育った植物には不思議な力が宿るらしい。目の前のツタをよくよく見れば、てっぺんに薄い青色をした朝顔の花がご丁寧に咲いていた。

「一日埋めて成長させておいた。橋の裏を伝って表の真ん中まで伸びるように、術をかけておいてな。——さて、」

新一はツタによって浮き上がらされた鬼を見上げる。

今度は左足でとん、と叩くと鬼の首からだけツタが外された。

一旦締められた喉に突然空気が入ったので、鬼が咳き込むように息を荒く吐き出す。

「このような奇行を行った理由を聞かせてもらおうか。黙っていても無駄だからな。この朝顔のように術をお前にかけて無理矢理言わせることも出来るぞ?」

何とも形容しがたい笑みを浮かべて脅しとも取れる尋問をかける。平次は固唾を吞んで見守っている。

しばしの無言の後、根負けしたように鬼が口を開いた。

「……私の楽器をどこかへやった、あいつが悪いのだ」

「ほう」

「百年ほど前、私は都の雅楽寮に務めていた」

平次がはつとする。

自分と同じところではないか。

「ある日、帝の前で私が演奏することになった。この上ない誉れだ。

……しかし、当日私の倉から楽器が全て消えていた」

「盗られたのか?」

「ああ。政敵であった男に夜のうちに盗られたとしか考えられない。おかげで、当日になって演奏中止という非礼をする羽目になった」

「誰かには言わなかったのか」

「言おうとしたさ。だがそれよりもあの男のほうが早かった」

——どうやら、女へ色々貢いでいるうちに金に困ってしまい楽器を売っていたらしい。もう手元には大した価値も無い楽器しか無いから辞退したんだろうよ——

そんな噂を立てられた後では、何を言っても言い訳にしか聞いてもらえない。

しかも政敵は鬼となった男とは全く関係無い女を金で使い、貢いでもらっていたという偽の証言させていた。

立場を追い詰められ、男は世を儚んだ。

そして、

「この橋から身を投げた。だが百年たった今でもあの悔しさが忘れられない。都から聞こえる楽器の音が、私の悔しさを倍にさせたのだ。悔しさと共に膨れ上がる憎しみに耐え切れなくなり、鬼と化してしまっくらいに。だから、全ての音を取り去ろうとした」

いつのまにか鬼は、ほろほろと泣いていた。

鬼の形相なのに、涙は人間と同じく透明だった。

「そないな卑劣なことがあそこであったんか……」

情に厚い平次も思わず鬼に同情する。

一方、新一は黙って鬼を見つめていたが、次にこう言った。

「鬼よ、実は俺は昼間に楽器に関するこの橋の出来事を調べていた。するとお前の身投げが記録として発見できたよ。そして、楽器の行方も調べてやった」

「なんと」

俯いていた鬼が顔を上げる。

「残念ながらその政敵の男が楽器を売り払ってしまったみたいだが、一つだけ今の世まで残っていた、お前の筆簾ひちりきがあった」

懐から新一が布に包まれた細い棒状のものを鬼の前に差し出し、三度左足を叩く。

すると鬼に纏わりついていたツタはそこから離れ、種のあった場所まで縮んでいった。

足に地をつけた鬼は、震える手でその管楽器を受け取った。布を取り、中から出てきた古めかしい筆簾を抱いて、おおおおと泣いた。

涙に濡れた顔がだんだん先ほどの人間のような顔に戻っていく。二本の角がすぼみ、髪の毛も肩ぐらいまでに縮まる。

「こんなところで再び会うとは。私の元に音が帰って来たのだな……」

土色から血の通う肌色へ戻った顔に、今度は白い粉がかかったようなまだら模様が現れ始める。

それは頭から下へ全身を覆うように広がっていくが、鬼は気にせず筆簾を頬ずりする。

やがて粉一色となった「男」は、そのまま消えた。

新一と平次を残して、鬼であった男はその場で筆簾と共に灰となってしまうたのである。

「なんや、やりきれない事件やったなあ……」

「ああ」

鬼の一件を終えて、新一の屋敷へ戻った二人は酒を飲み交わしていた。

蘭が晩酌をしている。

橋の上ではまだ朱色だった空が、すっかり星のきらめく夜へと変わっていた。

部屋から見える庭にはさきほど世話になった朝顔が花弁をしばませ、次の日の陽光に備えているようだった。

鈴虫の鳴き声が、彼らを包む。

昨日よりかは涼しげな風が吹いている。

「そつえば、お前ようわかったな。あの乙暗鬼の正体」

「さつきも言ったとおり、あの橋での楽器に関する記録で調べればすぐにわかったさ。売り払われた楽器の行方は少し苦労したけどな」

「それを夕暮れまでやってたんか」

「そうだ。ちなみに、朝顔の種を使おうとしたのもそのためだ。種を用意しなくてもその場で鬼を捕まえられる術もあつたけどな。鬼の調査のほうに少し時間が要るから、それに合わせて一晩かかる種の術を使った」

「そんなら、鬼を捕まえてからわざわざ音を取る理由を聞いたんは、昼間の調査の答え合わせみたいなもんやったんか？」

「まあ、そんなところだ。万が一調べが間違っていたら意味が無いからな」

「ほお」

大胆なようで用意周到。

新一とはそういう男らしい。

話せば話すほど底が見えてこない男を目の前にして平次は感嘆する。

「今回、お前とこうやってちゃんと話をしてみてわかったわ」

「何をだ？」

「他の者が敬遠するような恐ろしいもんなど全く持ち合わせておらん、ええ奴っちゅうことや」

新一の手が止まった。

無表情だったが少し驚いているようにも見える。

どう返事をしたらいいものか。

そうつ戸惑いだ。

恐らく、初めて言われた言葉だったのだろう。

所在無さげに視線をうつつかせた後、再び平次のほうを向いた。

「なんか、お前に言われたら世話無えな」

「なんやそれ。せつかく人が褒めてんのに」

「俺も褒めたのさ」

「そうかあ？」

そんな二人のやり取りに蘭がくすくすと笑う。

平次が疑問符を頭に浮かべるように彼女のほうを見たが、次に何かを思い出したように杯を床に置いた。

「そうやそうや、すっかり忘れるところやった。約束通り笛を吹かせてもらおうと思うんやけど……ほんまにこんなんであえんか？」

「ああ、是非聞かせてくれ」

平次が懷から葉二という名の笛を取り出す。

これも特別な笛なのだが、その詳細はここでは省く。

ただ、この世に二つとない名器であることには違いない。

一瞬の間。

静かに目を閉じ、平次は吹き始めた。

夜風に染み込むような、透き通る音。

月にまで届くかのような、空気の震え。

不思議なことに鈴虫が鳴くのをやめている。

「……見事だ」

ぼつりと新一が言った。

蘭も酌をする手を止め、新一に同意の頷きをする。

無の心になっっている笛の名手は、滅多に出さない彼の褒め言葉に
気付かなかったが。

陰陽師の心をも動かす葉二の音に、どこかで拍子を合わせる簞箒
の音が、蘭には聞こえたような気がした。

「乙暗鬼」 肆（後書き）

短い連載でしたが、ありがとうございました。

きりがいいのでここでとりあえず終わらせていただきます。

自分の好きなように設定を作り、オーソドックスな話を作り、ついでに目次頁へ背景画像挿入も試してみたり、作者としては結構楽しかったです。

他のキャラの設定でもあるにはあるのですが、まだ続けるかどうかは決めかねています。（苦笑）

好き放題に書いた久しぶりのパロディ小説ですが、楽しんでいただけたのなら幸いです。

「夢杭蟲」 壺（前書き）

内親王…天皇の皇女および姉妹を指す

中宮職…中務省に属して后妃に関わる事務などを扱う役所

「夢杭蟲」 壺

生温い湿気を含んだ風の吹き通る工藤新一の屋敷。

飛蝗バツタと思われる黒い影が、闇に染まる庭で飛んだのがわかる。

心なしか、飛蝗も暑さで動きが少し鈍っているように見えた。

庭に咲く女郎花おみなえしの黄色が、唯一の涼かもしれない。

その女郎花を一輪、瓶に挿して置いてある側の莫蔭に座する二人がいた。

屋敷の主である新一と、その友人の服部平次。

赤い唐衣を来た女性に酌をしてもらいながら、縁側でゆるりと新一は酒を飲む。

彼の正面で平次も飲んだ。

先日の笛の鬼の一件以来、こうやって酒を飲み交わすことが増えた。

そのほとんどがこの新一の屋敷であつたが。

殿上人の平次は徒歩で一人でここへ来る。

時には良い酒を持って。

今日はその日であつたようだ。

静かながらも、新一が上機嫌であるように見えるのはそのためだろつ。

「今夜は一層暑いな。寝苦しくなるやろなあ」

「そつだな」

「……そう言う割には、何かあんまり暑そうな顔してへんで工藤」

「そうか？ 俺だって暑いぞ」

涼しげな顔でさらりと言う彼は、隣で酌をする蘭に「なあ？」と言う。

黙って彼女は頷いた。

「暑く無さそうな顔で暑いて言われるとなんか癪や」

「そう膨れるな、服部」

「膨れとらん」

「いや、膨れてる」

面白そうに笑う新一に服部はふいと横を向いて、杯に残った酒をぐいと飲み干す。

「もうええわ。何やお前と話をしとるとどうも調子が狂いそうや。……ところで、寝苦しいといえばあの巫女殿の話を知っとるか？」

「巫女？」

「そうや、内親王様にお仕えしている巫女的美和子殿というお方のことや。腕の良い巫女らしいからお前もその方自身は知っとるやろ」

「ああ知ってる。俺も一度お会いしたことがあるが……その方がどうしたんだ？」

「数日前から目を覚まさんらしい」

「ほう」

巫女の名を美和子。

今まで数々の神にまつわる儀式を執り行ったことのある、有能な巫女である。

専属ではないが、よく内親王に関わる占星術的な行事の際には必ず同行している。

そんな彼女に突如異変が起こったのは三日前。

いつも早朝に起床している彼女が、日がすっかり昇ってから部屋から出てこなかった。

不審に思った家人の由美が部屋に入ると、まだ眠っていた。

ただ眠っているだけではなく、苦しそうに汗を掻きうなされている状態。

慌てて起こそうと揺すってみたが、目を覚ます気配はない。

苦しいのに起きないのだ。

「色んな医師が見はったけど、どうにもならんらしい。このままやったら死ぬかもしれんとも聞くわ」

「なるほどな」

「もしかしたら、お前のところにも頼みがくるかもしれんな」

物理的な対処が駄目なら、後は目に見えぬものを対処する陰陽師に頼むほか無いだろう。

となると、頼まれるなら陰陽寮随一の実力を誇る新一にそれが回ってくる可能性は高い。

平次はそう考えていた。

一方そんな可能性を聞かされた彼はあっさりとこう答える。

「来るかもしれない、ではなく来るさ」

「何やと？」

「お前のその話で今夜の来訪の理由がわかった。その巫女の容態を見るのが俺への頼みのようだ」

「来訪って……俺のほかには誰か来るんか？」

「ああ。内親王の縁戚に当たられる中宮職の高木涉様という方だ。昨日相談したいことがあるから訪ねてもいいかと聞かれていてな。もうすぐ来ることになっている」

皇后の妹の子、つまり内親王にとっては従兄弟にあたる人物だ。平次より格下だが新一よりは高い彼がここへ来るという。

内親王とそれに仕える巫女、そして血縁者。

ここに先ほど平次が言った出来事が繋がると新一は考えていた。

「夢杭蟲」 壺（後書き）

評価欄やメッセ等で続編を希望してくださる方々がいらっしやったこともあり、シリーズのような感じで続けてみました。

設定だけは色々考えてあったので続けやすいかなと。

温かいお言葉本当にありがとうございます。

そしてその続編のゲストキャラは高佐のようです。内親王は誰でしょうね（笑）

「夢杭蟲」 貳

一刻ほどの後、新一が明かした来訪者の高木が現れた。

平次ほどではないとはいえ身分は高いほうなのだが、その生まれ持った気質ゆえかどうも腰の低い様相を呈した人物だった。

水色の束帯を着た彼は格下の新一にためらうことなく頭を下げる。

「急に申し訳ございません、工藤様。どうしてもお頼み申し上げたいことがあります……」

「構いませんよ高木様。それより、急を要することではなかったのですか？」

「もうご存知でしたか」

「はい、先ほど服部様から巫女様のことを聞かせていただきました」

新一は他人がいる前では平次のことを「服部様」と呼ぶ。
呼ばれた平次は高木に問うた。

「やっぱり、まだあの巫女殿は起きられへんのか？」

「ええ……我々も手を尽くしましたが……」

無念、と言う言葉が当てはまりそうな顔で彼は少しだけ歯を食い

しばった。

本当に気落ちしているようだ。

それまで新一と平次が酒を飲み交わしていた名残で、蘭が高木の前に杯を差し出そうとする。

だが彼は申し訳無さそうに黙って横に首を振ることによって断った。

「巫女様に異変が起こった原因はわからないのですか？」

新一が穏やかな声で聞く。

対して高木はためらうように目を泳がせた。

何か後ろめたいことがあるのだろうか。

しかしためらったのは一瞬で、次に目の前の二人を交互に見る。そして意志の強い目で問いかけてきた。

「今から申すことは、他に言されぬようお願いできますか？」

「もちろんです」

快諾を新一が示す。平次も黙って頷いた。

それに何かを腹に決めたように高木は事情を説明し始める。

「巫女的美和子様のご容態が悪くなる前に、哀内親王が気分が悪いと仰られて御引き籠もりになられたのがきっかけでした」

平次がはつとする。

「医師が容態を見ても一向に原因がわからず、これはもしや呪いではと周囲の者が感づき、美和子様に見てみるよう命じました。そして美和子様はそのお力で、愛宕山の麓から呪詛を内親王にかけている者がいることに気付いたのです。早速、呪詛をかけた者にそのまり返す儀式を行い、成功しました」

都でも指折りの巫女である。

誰にも悟られないように呪いをかけていた方術師の存在に、彼女はすぐさま察知した。

鮮やかな手つきで呪詛返しの儀式をすると、かけた側の方術師は愛宕山の麓にある洞窟で死んだという。

死亡確認を家来から聞き、父である宮野天皇も含めた周囲の者は安堵した。

が、それだけでは終わらなかった。

「内親王の容態は回復したのですが、次の日静養を御取りになるべく眠っていらつしやった美和子様が目を覚まされず……」

熱にうなされ苦しんでいたということである。

宮野天皇の第一皇女・哀姫が誰かに呪いをかけられたということが知れ渡ってないのは、朝廷に無用な騒動を起こさたくないためであろう。

事実、ここで初めて知った平次は声には出していないが、内心相当驚いている。

呪いをかけられたことも驚きだが、それを仕掛けた人物がいるということにだ。

死んだという方術師単独の行動とは考えにくい。

内親王が亡くなっても利益が無いからだ。

彼女が亡くなることで得をする者と言えば朝廷、もしくは帝に敵意を持っている人物だけだろう。

そしてその人物が朝廷内にいる可能性は低くはない。

一方新一はそれに関しては興味がさほど無いように見られた。眠り続けている原因のほうに関心があるようだ。

「では、私にその巫女様にかかった悪いものを取り払えということでしょうか」

「はい。とても苦しんでいらっしやるので出来れば早いほうが」

「そして人目につかないよう内密に、ですね？」

「……そうです」

事を荒立てて内親王への呪いが周囲に知られてはまずい。

「では今から伺ってもよろしいですか？ 夜のほう人氣が無いです」

「願っても無いことです」

「それと、服部様も一緒に構いませぬか？」

「は？」

拍子の抜けた声を出したのは当の平次。

興味があるので着いていききたい気はしていたが、邪魔になるだろうと思っていたのも事実だ。

まさか新一自ら連れて行く気だとは思わなかった。

「それは一向に構いませんが……」

よくわからないまま、高木は是を示す。

「ええんか、工藤。俺が着いていつでも邪魔にならんか？」

「いいえ、貴方がいることで大いに助かることがあるかもしれせん」

「なんやそれ？」

「まあ、ここでは伏せておきましょう」

言葉遣いは丁寧だが、先ほど平次を膨れさせた、楽しそうな顔つきをしている。

疑問符を頭に浮かべそうな平次をよそに、ずっと新一は立ち上がった。

「それでは参りましょうか。巫女様がお待ちになっておられる」

「夢杭蟲」 弐（後書き）

帝…宮野厚司

内親王…哀

志保ではなく哀にしたところがミソです（笑）つまり18歳ではなく7歳バージョンで。

お雛様のような哀を想像して、「彼女が内親王というのとも良いなあ」と思いました。

今回の「夢杭蟲」編ではこの会話のみでしか出てこなさそうですが、設定だけでも楽しんでもらえれば。

「夢杭蟲」 参

蘭に留守を任せ、新一達が高木に案内された美和子の居場所は彼の屋敷だった。

彼女の住んでいる屋敷からつれてきたらしい。

「呪詛をかけた者の仲間がもしいたら狙われるかもしれない状況で、美和子様を女性ばかりの屋敷に居させておくのはいささか心配です。」と彼は説明をしていた。

そこで何故高木の屋敷に？ と平次は疑問視したが、別におかしくはないかと思ひ直す。

内親王の周りは呪詛騒ぎでまだばたばたしているはずだ。

それなら、程よく内親王から距離の取れた関係である従兄弟の高木が巫女の世話を受け持つても不思議ではない。

牛舎で門まで行き、寢殿造りの屋敷に入って奥の小さな間に通される。

薄ぼんやりとした明かりの中、当の彼女はいた。

苦しそうに息を吐き、汗をびっしょり掻いた状態で。

美しい眉が歪み、いつもは朱色の唇が真っ青になっていた。

三日間眠り続けているせいで、布団越しでも痩せ衰えているのがわかる。

屋敷まで連れ添って来た由美が、悲痛な面持ちで額に当てていた布を取り替えた。

「容態は？」と高木が聞くと由美は黙って首を横に振った。

その彼の後ろから新一と平次が静かに入る。

高木に促される形で二人は美和子を挟んで由美とは反対の側に座る。

新一は美和子を見て、表情を変えないまま視線を布団から出てい

る彼女の左手にちらりと移した。

「この方が陰陽師の……」

その動きには気付かず、由美が隣に座った高木に問う。

「ええ、早速見ていただけることができたのでお連れしました。こちらが陰陽師の工藤様で、お隣の方は服部様です」

新一と平次がお辞儀をする。

慌てて由美も頭を下げた。

「で、大まかに見られてどうですか？美和子様のご容態は……」

「早々に手を打たないといけませんね。どうやら、巫女様には死んだ方術師の怨念が取り憑いてしまったようです」

「……」

彼女の異変に、死んだ方術師が関与していることは薄々気付いていたらしい。

さほど驚かない様子で、高木は表情を険しくさせた。

「確かに巫女様は見事な呪詛返しを行われました。しかし、方術師はすぐには死ななかつたのでしょうか。今際の際に、自分の念が籠つたある物を巫女様に憑かせたと考えられます」

「ある物、ですか？」

「はい。苦しくてもずっとお眠りになられている状態で予想はついていましたが、こうやって今拝見し、確実にになりました。早くその憑いたものを出さないと食い殺されるでしょう」

「食い殺されるつちゅうのは一体……」

取り殺されるのではなく、食い殺されるという。
その表現に平次が疑問を投げかける。

「出せばわかりますよ。すぐに済む方法で対処しましょう。筆と硯をご用意しますか？」

「は、はい！」

高木が部屋の外に控える家人に持つてくるよう命じる。

一方新一は懷から布に包まれた何かと空の袋を取り出し側に置いた。

「何やそれ？」

「今から取り憑いたものを捕まえるのに必要なですよ」

すぐに用意された筆を受け取った新一が、硯の墨にそれを漬け込む。

そして「失礼します」と言って、布団から出ていた美和子の左手をずっと自分の左手で持ち上げた。

さらさらと何かを手の甲に書く。

梵字のようだ。

数行ほど書いてからまた彼女の手を布団の上に置いた。

「一体何をお書きになったのですか？」

「取り憑いたものを誘き寄せるエサのようなものです。巫女様の中には今、蟲が棲んでおりますので」

そう言い終えるや否や、突然美和子の左手がびくんと動いた。

手が、というより手の甲の辺りからぼこりと何かが飛び出しそうな勢いで弾んだ感じた。

びくびくと手が上下に動く。

彼女の息苦しさは変わらない。

「美和子様！」

「大丈夫です、高木様。今誘き寄せられた蟲が左手に來ただけです。
……服部様」

「な、何や？」

「今笛を持っていらっしゃいますか？」

「へ？そら一応持つてるけど」

「今ここで合図があるまで吹いて貰えませぬか？」

「ここでやと？」

「はい、今すぐに」

新一の柔らかい言い方の中に断れぬ強さを持った願いに平次が懷から竜笛を出す。

はふたつ
葉二、という名器だ。

手に取って、もう一度新一を見る。

彼は黙って頷いた。

合わせて平次も頷き、笛を口元に当てる。

少しの沈黙。

笛の音が静かに小さな部屋を包み始めた。

ゆらゆらと揺れる蠟燭の灯と波長を並べるように、小さな、だが確実に人の心を透き通す拍子を持った音だ。

一方、急に美和子の手の中で大きく蠢いていた何かがその動きを小さくし始めた。

ぼこぼこ動くが、手そのものが弾むような強さではない。

ここで新一は、側においていた布の中から手のひら大の細い針を数本取り出した。

そして彼女の動く甲に、とんとんと指で等間隔に円の形に差す。
まるで動くそれを杭の檻で囲うかのような。

針で囲われた円の中で、びくびくとしながらそれは段々静かにな
っていく。

新一が右の人差し指と中指を自分の唇にあて、何かを唱えた。
唱え終わると空いた左手をすつと針の上にかざす。

すると、

——ぼこんっ

突然そんな音がするかのような、親指位の大きさをした黒い物体
が手の甲から出てきた。

手足が六本ほど生えた蜘蛛の如きものが、傷口も何も無いのにい
きなり飛び出したのだ。

針の円の中から出られないらしく、カサカサと甲の上で忙しく動
いた。

ひっ、と由美が抑えた悲鳴を上げる。

平次はまだ合図がないので笛を吹き続けているが、驚いた様子で
目を丸くさせる。

高木が思わず短剣を手に取りうとした。

「お待ちを」

彼を制して、新一が余った針で蜘蛛の背中を刺す。

不思議なことに血は出ない。

串刺し状態にした蜘蛛をひょいと手の甲から離して、側に置いてあつた袋に針ごと素早く入れた。

この袋にもなにやら梵字が書いてあり、入れると中で動き回っているのが端からわかった。

袋が左右に揺れる。

構わず新一は紐できつく口を縛った。

「いいですよ、服部様」

終わりの合図がやっと出される。

平次が口元から笛を離す。

ふう、と一息ついて美和子を見た。

いつの間にか、苦しそうに喘いでいた彼女は穏やかな顔つきで眠っていた。

「夢杭蟲」 肆

ずっと水の中で溺れている様な感覚だった。自分の異変に気付いた時にはもう遅かった。

目を開けることも体を動かすことも出来ない。ただ眠り続けることしか術は無く。

最初のうちは、それでも夢を見ていた。

それこそ溺れていたり火に炙られる悪夢を、だ。

あまりの苦痛に死にたいと思うこともあった。

しかし、苦しみの向こう側に見える「彼」の笑顔が自分を奮い立たせた。

——もう一度、あの人の笑顔を見ない限りには死んでも死ねない。

ひたすら悪夢に耐え続けた。

その悪夢さえ消えかけてきたのは、異変が起こった二日後。何かが夢を奪っている。

いや、食っている。

どんどん夢が無くなって自分という意識が無になるのを予感した。彼の笑顔が、見れない。

どれくらい蟲に食われたかどうかもわからなくなった。

黄泉の国に足を一本突っこんでるかもしれない。

だが、もう全ての夢が消えそうになった時どこからか笛の音が聞こえた。

次の瞬間、空気を吸い込むかの如き開放感を覚える。
瞬く間にいくつもの灯がまぶたの裏に灯った気がした。
そして、ふっと目を開けた。
目の前に飛び込んだのは、とても心配そうな顔でこちらを見下ろす「彼」の顔。
隣にはいつも側で生活を支えてくれている家人、いや友の顔もある。

——ああ、帰って来た……

美和子は三日間の”無”の恐怖に打ち勝ったのだ。

「良かった……！」

蟲退治が終わってから数分後、美和子が目を覚ましたのを見て涙を流しながら、由美が呟いた。
高木も涙をこらえている様子で見つめた。

「美和子様」

「ご心配を、おかけしました……」

彼女の言葉に彼は首を横に振り、無事でよかったと付け足した。
そんな彼に優しい視線を向けつつ、彼女は反対側に座る二人の男
に気付く。

一瞬で何者かはわかった。

「どうやら世話をかけたようね、工藤様」

「いえ、ここまで踏ん張ったあなた自身のおかげですよ」

同じような職業柄ゆえ、無駄な言葉は要らない。
首だけを新一のほうに向け問いかける。
起き抜けと疲労により少しだけ声がかすれた。

「私は何かに取り憑かれていたのよね？」

同業者は頷き、手元の袋を彼女の前にかざす。

「はい。ここに収めし袋の中にその蟲がごぞいます。恐らくこれは
……」

「夢杭蟲、かしら」

「もうわかりでしたか」

感嘆するかのように声を若干高めた。

だが、彼女は当然だといわんばかりに言葉を続ける。

「自分の体で起こったことです。ずっと眠ったままで苦しみ続けることもさることながら、夢がだんだん消えていったことが夢杭蟲の特徴だわ。蟲に夢を食われ、夢という意識が全て無くなった時私は死ぬことになっていたんでしょう」

他人事のように淡々と解析する。

死、という言葉に高木と由美はつばを飲み込んだ。

「そうです。私がここに来た時にはほとんど全ての夢が食われていたところでした。ですから取り出しやすい手のひらに蟲を誘き寄せ、針で刺しました」

「じゃあ、俺の笛は何のためやったんや？」

横から平次が聞く。

事が急を要すようだったので、あの時は何も聞かずに大人しく吹いたがずっと気になっていたのだ。

なぜ、自分の笛が蟲を捕まえるのに要るのだろうか。

「あれは蟲の動きを大人しくさせるためです。服部様の笛にはこの世の全てのものを静まらせる力を持っておりますから……」

恭しく新一が答える。

その答えを平次は信じられない。

「俺のただの笛がか？」

「そんなことはありません」

ふと、美和子が否定した。

「夢も無く、何も感じる事が出来なかった私でさえ貴方様の笛は聞こえたような感じがいたしました。とても素晴らしい音でした……」

その音を思い出すかのように、彼女は目を閉じる。覚醒してからすぐに会話をしたため疲れたようだ。閉じたまま開けようとしない。

「無理をせずそのまま休んでください」と高木が声をかけると、無言で頷き再び眠りに落ちていった。

由美がゆっくりと、乱れていた布団を綺麗に伸ばす。

完全に今度は安息の夢の中に入り込んだのを見計らってから、高木は工藤に話しかけた。

「工藤様、これから私達はどのように美和子様を介抱すればよろしいでしょうか」

「そうですね。三日三晩飲まず食わずで眠っていらっしやったのですから、次に目を覚まされた時には、粥などをお召し上がりになれば良いでしょう。蟲の仕業ということなので薬などには必要ありません。ゆっくりとご養生下さいませ。それに……」

高木の顔を見て何かを含んだ笑顔を見せる。

「このお屋敷には美和子様にとっても良い空気が流れております。誰かが呪いをかけようとしても、その空気が防ぐでしょう。誰かを大切に思う心は、それだけでどんな術にも勝る武器になるんですよ」

一瞬、高木が虚を突かれた様に目を丸くし、次に苦笑した。
新一の言葉に思い当たる節があったのだろう。

「やはり貴方はすごい方です。貴方に頼んで本当に良かった」

「身に余る光栄でございます。……では、用も済んだことですし我々はお暇させて頂きましょう」

「そんな、もう夜も遅いですし今夜は我が屋敷にお泊まり下さい。酒なども用意させますので」

早々の退出に高木は慌てて引き止める。

美和子の命を救ってくれた恩人をこのまま帰すのはなんとも忍びないと思っている。

そんな建前ではない彼の真摯な申し出が新一にもわかっていうで、心から申し訳無さそうに断りを入れた。

「それは大変ありがたいことです。私も本来ならばそのお心ぜひとも受け取らせて頂きたかった。しかし、まだ私には用がありますので」

「こんな遅くにですか？」

「ええ。蟲退治をした今だからこそ用が出来てしまいました」

意図を掴みにくい彼の言葉に高木は不思議がったが、そこで無理に引き止めはしなかった。

引き止められない代わりに、牛車を急いで用意させる。

本当の意味で、人が良いのだろう。

美和子を由美に任せ、高木が二人を門まで先導する。

その後ろを着いていく平次が隣の新一に小声で話しかけた。

「なあ、工藤。用って何や？」

「さあな。実のところ、俺も用があるかどうかからねえ」

「わからんて……」

「ただ、用があるとすれば面白いことだろうな。何なら着いて来るか？」

先に平次が自分の屋敷に送り届けてもらう予定だった。

それを通り越してそのまま新一の屋敷に來ないかと言う誘いである。

不確かな用事に一瞬考える。

だが、「面白いこと」という言葉が氣になったので「なら行く」と答えた。

新一にとっての面白いこととは何だろうと興味が頭をもたげたのだ。

前に行く高木に聞こえぬようにひそひそと話していると、すぐに門の前に着いた。

松明を持った従者が既に牛車を用意している。

促されるまま平次の次に新一が乗り込んだ。

そして屋敷の主に向かって頭を下げる。

下げられた側はより深々と下げ返した。

「本当にありがとうございました。此度のご活躍は近いうちに帝にもお伝えいたしましょう」

「いえ、私は自分ができることをしたまでですので。あの美和子様を、大事になさいませ」

「……ええ。必ずやきつと」

そのまま扉は閉められ、車はゆっくりと一条に向かって進み始めた。

欠伸をする平次の隣で、新一は懷に持った袋を手で確かめる。袋の口を紐で縛ってからには大人しくなった蟲が、少しだけかざりと動いたような気がした。

「夢杭蟲」 肆（後書き）

何やらまだ続く余韻がありますが「夢杭蟲」編自体はここで終了です。

最後間延びした投稿になりましたが、お付き合いくださった読者の皆様本当にありがとうございます。

そこまで目立たせてはいないものの、こういった高佐の雰囲気は好きです（笑）

言葉を交わさなくても通じそうな辺りが特に。

次回は、新一の言う「面白いこと」です。

事件というよりオマケみたいな要素が強いかもしれません。

どんどんキャラは出していききたいと思います。

「新一、黒き呪術師に会うこと」 前

高木の屋敷から新一の屋敷に戻った二人は、縁側で再び酒を飲んでいた。

闇夜に浮かぶ月を眺め、新一は平次の笛に耳を澄ます。

つい先ほど、夢を喰う蟲から巫女の危機を救ったあの音だ。

心地よい音色が耳元で踊るような感覚を彼は覚える。

何かを待っているかのようにじっとして莫^も座^ざから動かない彼をちらりと見て、一方の平次は笛を吹く前の会話を思い出した。

——で、こうやって戻ってきたわけやけど、面白いことって何なんや？

——そう急ぐな。さっきみたいに縁側でまた酒でも飲んでたらきつとわかる。

さらりと質問を交わされて、笛を乞われて。

今のこの状態がある。

新一の酌をする蘭の隣で、袋から鳥かごに開けた例の蟲がかさかさ動いてるのも非常に気になるところだったが。

手の平くらい大きな蜘蛛のような蟲はかなり不気味だ。

しかし、こうやって何も答えない新一に問い詰めたところで無駄だということは、短い付き合いながらわかっている。

（ま、しゃあないな）

内心ため息をついて笛に集中しようとした。
が。

突如強さを増した夜風が一閃縁側を通り抜け、蠟燭の火を消してしまった。

盆の上の小皿も裏返ったようだ。陶器が音を立てて床を転がるのが聞こえる。

「——来たな」

「え？」

杯を床に置き、風がやって来た方向の庭を新一が見た。

楽しそうに口角が上がっている。

つられる様に平次も笛を口から離して、同じ向きに視線を遣る。

しかし真つ暗すぎて何も見えず、庭にいた虫の鳴き声もいつの間にか聞こえない。

「おい、工藤」

一体何が来たのだと平次は聞こうとして、新一の方を向くが途中ではっとした。

視界に入った蘭が、暗闇でもわかるくらいにいつもより厳しい目をしていたからだ。

口からは何も発せず、じっと新一と同じ方角をにらみ続けてている。

彼女にとっては、あまり歓迎できないものが来るのだろうかと平次は予感した。

そして、その予感は的中することになる。

もう一度強風が吹く。

庭に生い茂る草花が斜めに曲がり、その間から黒い影がうつすら見えた。

闇夜に現れた、更なる黒。

平次は目を凝らしてそれを確認する。

しゃくり……、
しゃくり……、
しゃくり……、

黒い影は草花を踏みしめゆつくりとこちらに近づいてくる。

足音と共に、その影はかなりの長髪であることがわかってきた。

しかも平次達とは全く違う、銀色の髪だった。

そんな黒い狩衣を着た銀色の男を視界に捉え、一瞬蘭をまとう空気が変わる。

彼女の長い髪の毛と着物が何かの力を持ったかのように少しだけ浮く。

そして目が、いつもの色ではなくなり――

「よせ、蘭。この方は客人だ」

新一が彼女を制した。

彼女の変化に気付かなかった平次は驚いて蘭のほうに向き直ったが、すぐに彼女はいつもどおりの状態に戻っていたので知られることは無かった。

「……ふっ、どうやら俺はその鬼に大層嫌われているようだな」

影は笑い、指を乾いた音で鳴らす。

すると消えていた蝋燭の火が再び灯る。

おかげで平次は、影の顔をやっと思えることが出来た。
痩せ狼のような男だと彼は思った。

「お久しぶりですね。——黒澤陣殿」

新一が軽く頭を下げる。

黒澤陣と呼ばれた男は不適な笑みを浮かべた。

「新一、黒き呪術師に会うこと」 前（後書き）

かなり前話から間が伸びましたが、やっと更新です。

一応注釈しておきますと、黒澤陣[〓]ジンです。

流石に片仮名の名前はこのパロディには合わないだろうと思い、彼の偽名から拝借しました。

格好や雰囲気は、大河ドラマ風林火山のガクトをイメージしていた
できれば（笑）

「新一、黒き呪術師に会うこと」 後

新一と同じく陰陽道の名門出身で、播磨に住む呪術師。

黒澤陣という名で平次が思い出したのはその二つだった。

腕が良い術士ということでも都でもちらほら聞く名前だったが、こ
うやって合間見えたのは初めてだったので驚く。

この銀髪の黒装束を纏う男が、あの黒澤なのかと。

「やはり、内親王に呪いをかけた呪術師にこの蟲を渡したのは貴方
でしたか」

「渡したのではなく、貸したのさ」

冷たい目でくつくつと笑う。

「同じ播磨の出というよしみで俺のところに頼みに来たが——あの
程度の腕では使いこなせなかったようだな」

「貴方のように世俗に無関心な方が、何故内親王を殺そうとする輩
に蟲をお貸しになられたのです？」

「面白そうだったからさ。あの小娘が死のうとも死なずとも、どち
らにせよ面白いことになる。実際、お前が引つ張り出され珍しい術
を見ることが出来た」

哀内親王を小娘と呼んだことに対し、平次の顔色が変わる。

彼ら公達にしてみればありえなさ過ぎる無礼だ。

思わず咎めようとするが、それは新一の静かな笑い声によってやめてしまった。

「成程。結局俺は貴方の手のひらの上で踊っていたということか」

「フン、知ってた上で敢えて踊っていたのだらう、お前は。……さあ、その蟲を返してもらおうか。腕利きの巫女の夢を喰ったそれは良い式神になる」

陣がここに来てからずっと忙しくカゴの中で動き続けている、黒い蜘蛛のような蟲がその言葉に呼応するかのように更に動きを活性化させる。

横目でそれを見た新一は肩をすくめた。

「仕方無いですね。貴方と同じく私も巫女殿の夢を食べたこの蟲には興味がありました、蟲自体が貴方と呼んでる以上そこまでして拒む理由が無い」

「お前はお前で高木家から褒美を貰っているだらう。それで満足しておけ」

そう言つと陣はすつと右手をカゴのほうにまっすぐに伸ばした。次に、側の蘭が何もしていないのに勝手にカゴが開く。

蟲がふわりとそこから浮き上がり、新一と平次の間を飛んで陣の

手元に吸い寄せられた。

不気味なそれを、彼は躊躇うことなく片手で掴み、口元で何かを
咥く。

「なっ……」

すると、急に蟲が虎ぐらいの大きさにまで巨大化したので、平次
が驚嘆を漏らす。

新一も感心したかのようにそれを眺めている。

元の持ち主の下に戻った蟲は大人しく、陣がその背にどかりと胡
坐を搔くのを許した。

「そつえば、あの笛はお前が吹いたのか」

思い出したように蟲の背で陣が平次に問いかける。

まさか自分に問いかけられるとは思っていなかったので彼は驚く
が、素直に頷く。

「あ、ああ。そつやけど……」

「——そうか。お前はお前でこの蟲に劣らねえ面白いもんを見つけ
たじゃねえか。工藤新一」

陣は次に新一のほうに視線を移しにやりと笑うが、彼はそれに黙

って真意のわかりにくい薄い笑みを浮かべただけだった。

「まあいい。では、御暇させてもらおうか」

陣を乗せた蟲は六本の足で地を蹴って中に浮く。

そして三人を見下ろし、どこから取り出したのか土瓶を投げて新一に寄越した。

「酒だ。この蟲の代わりにくれてやる」

「これは珍しい。貴方からのものであれば、きっと美味しいでしょうね」

「さあな。その女にでも毒見させてやれ」

毒が入っているのだろうかと思わせるような口ぶりだ。

毒見に指名された当の蘭は無表情で彼を見つめていたが、陣は気にせずそのまま蟲に乗ってそ空へ高く飛ぶ。

飛ぶ瞬間また風が起ったので庭がざわめく。

埃が入らないよう目をつぶった平次が次に瞼を開けた時には、黒装束の男も蟲もいなくなっていた。

呆けたように彼は月を見上げる。

時間に見れば短かったが、陣の独特な存在感に圧倒されたようだ。

「……なんや、ようわからんけどすごい奴やったような気がする」

「ような、じゃなくて本当に凄い奴なんだよ。あの黒澤陣はな。巫女殿を呪い殺せるほどの力を持つあの蟲を一目見て、彼が一枚噛んでると気付いたが、蟲を返しただけですんなりと引いてくれて良かったよ」

陣がいなくなったせいかな、平次と同年代らしい素振りに戻って新一が息を吐く。

「ほお、あの男が来るまではおもしろいことがあるとか言うて余裕たつぷりやったのに、ホンマは心配しとったんか？」

「ちげーよ。めんどくさいことになるのが嫌だったただけだ。今日奴が来なかったら、蟲の始末をどうするか色々考えないといけねえし、来たら来たで何か無理難題を押し付けられたら堪ったもんじゃない」

それはそれで心配の部類に入るような気もするが。

平次は内心そう思ったが、そこをつっこむと自分よりも口が回る新一に何を言い返されるかわかったものではないので黙っておくことにした。

「じゃあ、せっかく頂いたことだし飲んでみるか」

「おい、ホンマにそれ飲んで大丈夫なんか？ 毒見とかなんとか言うったで」

「あいつはああ見えて、やるときは正々堂々真っ向から来る男さ。毒を盛るくらいなら、さっきの蟲で何か仕出かしてたよ」

酒瓶の蓋を抜いて、新しい杯を持つてくるよう蘭に言う。

彼女は軽く頭を下げてすうっと空気に溶け込むように消えていく。台所に行ったのだろう。

その人では無い仕草に、平次は驚くことは無い。

代わりに笛を懷に収めて、何かを悟ったような笑みを新一に向けた。

「今日はお前の言うとおり、多分おもしろかったわ」

「多分かよ」

「お前のようなすごい奴が他にもおるっちゅうことがわかったせいで、何が不思議で何が驚きで何が怖いのかごっちゃになってしまった。けど、そういうもん全部ひっくるめておもしろいと思うことに、俺はした。」

「それはいい心がけだ」

彼の開き直りに新一も笑った。そして陣の言葉が思い返される。お前はお前でこの蟲に劣らねえ面白いもんを見つけたじゃねえか、というあの台詞だ。

（確かに、この男は面白い）

この場に居ない黒装束の呪術師に向かって、新一は内心同意を示す。

陣と対峙した最初の日がいつだったか忘れたが、あれ以来の楽しみが今あるのではないかと思った。

「蘭が戻ってきたらお前も存分に飲め。あの黒澤陣がくれた酒だからな」

二人を灯す満月の中に、兎ではない黒い影が時々飛んでいた。

「新一、黒き呪術師に会うこと」 後（後書き）

番外編第一弾、終了です。

蘆屋道満↓ジン（良い人っぽさ3割増し）

という設定で書きましたが、ジンの悪役度と好敵手度をいかにして混じり合わせるかが結構難しかったです。

原作のような彼のヒールさがかなり減ったようで、この辺はまた精進します；

次話は… もう一個くらい番外編出来たら。予定は未定ですが（コラ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4380c/>

陰陽ノ京

2010年10月10日06時02分発行